

駿河湾の深海魚 (7)

ツラナガコビトザメ (その2)

久保田 正・佐藤 武



図1. 胃内容物 (例1)

TL: 144.6mm, 雄、1969年10月11日 サクラエビ混獲
(左の魚はセンハダカ、他はイカ類の小片)

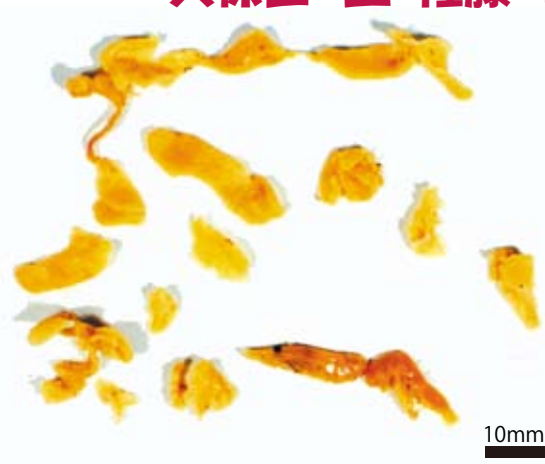


図2. 胃内容物 (例2)

TL: 104.3mm, 雌、1983年5月19日 サクラエビ混獲
(右下はエビ類、他はイカ類の小片)

駿河湾内から記録されているサメ類は約60種であり、世界中の海洋から知られているサメ類の約11.1%を占めています。そのうち、最も小型である本種は英名で smalleye pygmy shark と呼称されています。また同属内の オオメコビトザメ は spined pygmy shark と呼ばれています。

ツラナガコビトザメは、餌生物として主に中層に生息するオキアミ類、エビ類、イカ類、小型のハダカイフシ類などを捕食することが知られています。駿河湾内の奥部海域（由比、蒲原、原、沼津各沖）と焼津沖で行われたサクラエビ漁で得た81個体の胃内容物を調べたところ、餌生物として6生物群がみられ、それらは端脚類、アミ類、オキアミ類、サクラエビ、イカ類、魚類（ハダカイフシ類のイフハダカ、ヒロハダカ、センハダカ）などでした。これらの餌生物は、噛みきるという方法により小さな断片として捕食されていました（図1・2）。餌生物の出現個体数やその頻度が共に多かったのは、端脚類とアミ類を除いた他の4生物群であり、本種の食性は海域が違ってても対象生物は、深海性である点で同じ傾向でした。

また、捕食率 {胃内容物重量 ÷ (魚体重 - 胃内容物重量) × 100} は、0.1~5.0%、5.1~10.0%、10.1~15.0%の階級に含まれる個体は、それぞれ順に30、17、11であり、7階級のうち、これらの3つの階級を合わせると胃内容物を調査した81個体の71.6%を占めました。捕食率の平均が7.4%で、空胃率に13.6%（11個体）でした。本種の体重の約30%の餌生物を捕食している個体も見られることから、かなりの量の捕食能力があると考えられます。一方では、空胃個体も多いことから深海ではいつも餌にありつける状態にないことが示唆されます。

最後に、歯について紹介します。上顎歯と下顎歯の形状が全く異なっています。上顎には棘状の細長く直立した内側に数本の歯が列をなして並んでいます。また下顎には上顎の歯よりも大きな鋸歯が並んでいます。上顎歯の列数は20~27、下顎歯数は18~23です（図3）。



図3. 頭部腹面

TL: 193.1mm, 雄、1969年10月
サクラエビ混獲